

カトリック女王イサベルの宮廷における女子教育

マリア・イサベル・デル・バル・バルデイベン
(大原志麻 訳)

平成一八年(二〇〇六年)七月二十七日、スペイン文化省と日本の大
学間における文化協力協定であるグラシアン基金の後援、奈良女子大
学史学会の協力を得て、奈良女子大学比較歴史社会学講座主催で、ス
ペイン・バリアドリック大学中世史学科教授マリア・イサベル・デル・
バル・バルデイベン教授による講演会「カトリック女王イサベルの
宮廷における女子教育」が開催された。

デル・バル・バルデイベン教授は、一五世紀カスティーリヤを専
門とする中世史家であり、とりわけ博士論文『カトリック女王イサベ
ル。王位継承者期(一四六八—一四七四年)』^①を嚆矢として、通常ス
ペインのレコンキスタを終わらせ、コロンブスを支援したことで知ら
れるイサベル女王とその時代、後期中世社会の女性史に関し、多くの
論考を発表している。イサベル女王、及びその治世に関する最近の業
績としては、『カスティーリヤ女王イサベル一世』(二〇〇四年)^②、「後
期中世カスティーリヤ王国の家族における女性」^③、「中世における女性・
家族・家門」所収、二〇〇四年^③、「カトリック女王イサベルとその時
代」(二〇〇五年)^④、「カスティーリヤ女王フアナ一世の王位への道」

〔忘れられた声。歴史における女性〕所収、二〇〇三年^⑤、「悪しき者、
悪魔、女性」〔歴史を通してみる女性としての生〕所収、二〇〇五年^⑥
などが、挙げられる。

デル・バル・バルデイベン教授の研究テーマは、イサベル女王の
問題にとどまらず、政治史、女性史、文化史など多岐にわたり、それ
らについては、すでに数多くの国際学会で、発表報告がなされている。
また、スペイン内の多数の大学をはじめとして、フランスのCNRS
〔フランス国立科学研究センター〕、フランス国立社会科学高等研究院
ストラスブール大学、リール大学、トゥールーズ大学、ポー大学、ルー
アン大学、ポルトガルのオポルト大学、イタリアのプラート経済史研
究所、さらにヨーロッパ外では、メキシコ国立大学、チリのカトリッ
ク大学、アルゼンチンのブエノスアイレス大学、ペルーのリマ・カト
リック大学で客員教授を務めるなど、まさしく国際的に活躍されてい
る研究者である。

今回は、奈良女子大学という女子大学での講演会ということで、特
にご専門であるイサベル女王の時代の女子教育についてお話しした

いた。当日は、奈良女子大学関係者はもちろん、スペイン史、中世史関係の研究者が多数参加して、活発な議論が繰り広げられた。日本においては、このようなテーマでの議論は残念ながらよく知られておらず、ここにその講演内容を訳出することとした。

講演内容

ヨーロッパ史上、中世と認識されている、五世紀から一五世紀におよぶ時代の大半を通じ、知識と文化を伝達する支配的媒介となったのは、話し言葉であった。話し言葉は、いうまでもなく思想や情報の交流を確立する支配的な形態であり、宗教的信条や先祖以来の伝承から、最新の文学作品、もしくは知的思索に至るまで、あらゆる知識を伝える手段であった。

こうした状況のもと、女性は顕著な役割を果たしていた。なぜなら、彼女たちは日常的に、家の炉端や子供たちと起居を共にする部屋において、その日のできごととか、健康や詩歌、家事のことなど、母親や他の女性からおそわったさまざまなことについて、自分の知っていることを語っていたからである。このように、中世を通して、女性たちは伝統的な文化環境のなかで活発な役割を果たした。しかしそれは家内空間においてのみのことであった。なぜなら、一般的にいうと、女性は公的空間における発言を禁止されていたからである。

政治的な決定が下される領域、もしくは秩序立った文化の領域、つまり書き言葉が必要な家の外の空間では、女性の地位は異なっていた。

いかなる女性も、教会や政治的領域における公的な発言を禁じられていた。貴族の女性、修道女、都市有力家門の女性といった限られた女性たちのみが、学識もしくは学習の習熟への現実的な可能性を持っていた。幾人かの女性は、それをなしえ、自分の考えや、感情、知識を書き言葉によって表現するに至った。その中で最も有名なのは、クリスティーナ・ド・ピザンである。一四世紀と一五世紀を生きた女性で（一三六四～一四三〇年）、一四〇五年に寡婦となったのち、『女性の都市』《*La Ciudad de las damas*》を執筆した。

中世がその終焉にさしかかるころ、人びとは、印刷技術や書籍売買から刺激を受け、書き言葉の重要性が増すのに応じ、これに対する需要をますます高めていった。こうして書き言葉が、思想、知識、文学作品を伝えるうえで支配的形態へと転化していく。大学や学校が増え、権力者が図書室を設置したことからもわかるように、学識を培うことが、社会的に主要な役割を果たす人間としての差異化の指標となったのである。また同時に善行について、あるいは倫理上正しく教導することにについても、敬虔かつ模範的な読書がそれを補充しようと、理解されるようになった。しかし以下のことを付け加えなければならぬ。すなわち読書は、依然として、学識あふれる娯楽とみなされていたのである。

一般には、貴族の女性と都市の限られた女性住民だけが、アカデミックな世界固有の学識を習得していた。しかしそれは、大学あるいは学校において、男性と肩を並べて手に入れたものではない。そうした知

識の習得は、たいてい家のなかで行われ、そこで女性は一切の教育を受けたのである。そうした教育の一部は母親その他の女性によって施された。そして、このような女性が家を切り盛りするのに必要なあらゆる知識、家の成員の医療や栄養、家集団の社会経済的な利害にも注意が払われた。しかしこうした女性たちの一部は、教師から学ぶこともあった。教師は、彼女らに中世の典型的な基礎教育、読み書きや計算、賛美歌、文法に関する若干の知識やキリスト教教義の手ほどきをした。貴族に関しては、このような学識は、祈祷、刺繍、歌唱もしくは舞踏と並んで、余暇を楽しむうえで役立つのに加え、自らの社会的地位や威信を知らしめるうえで、大いに寄与した。また都市寡頭層に属する女子の場合、教育の目的は、夫をたすけて、家業を伸ばすことができる能力を身につけること、また、寡婦となったとき、あるいは夫が不在の際、そして息子が成年に達するまでのあいだ、同じ仕事をこなせるだけの能力を取得することに置かれていたのである。

こういった教育は、一部の女性たちにとって、知的世界、哲学、神学、文学、つまりは思索的、神話的、文学的な文化への接近を果たす道具となった。しかし日々の仕事や責務、つまり社会的な規範や要請の上では、女性がその知性を養い、知的世界に活発な参入を果たすことは、好ましいとは思われていなかった。このような理由から、一般に修道院は、女性にそうした自由を与えていたとされている。なぜなら修道院では、女性がその知的欲求を揚げ、より容易に自分の考えを明らかにできたからである。実際、女性の著作として知られている書

物の大半は、修道女が遺したものであった。¹⁾

このことは、女性主導の修道院が数多く存在するように、自発的に修道女となった女性が少なくなかったことを説明する。テレサ・エンリケスの事績は、カトリック女王イサベル期の典型である。彼女は、一五世紀末のカステイリヤ貴族の女性で、同女王の女官であったが、寡婦となったのちは信仰と慈善を実践して、聖体崇拜の普及活動に余生を捧げた。そのために信心会をつくり、のちにはフランチェスコ会則を取り入れた女子修道院も創設している。

現存する修道女の著作のうちでも、一五世紀後半の、ひとつの書物を取り上げなければならない。それはイサベル女王が特に関心を示し、自らの図書室に収めたいと望んだほどのもので、クララ会のトリニダー・デ・バレンシア女子修道院の修道院長、イサベル・デ・ビジェーナが著したものである。『キリスト伝《Vita Christi》』と題されたこの書物は、修道女向けに書かれたものであったが、キリストの生涯について知りたいと願う、いかなる人間をもその対象としていた。内容については、女性の模範像と、女性とはいかなるものかとの認識、女性固有の認識を模索していることが明らかである。そこではとりわけ聖母マリア、原初の女性エヴァ、マグダラのマリアが注目されている。つまり一三世紀以来、中世ヨーロッパ世界において大いに人々をひきつけたこの三名の女性は、一五世紀の女性に対して、訓告の題材、そして行動やふるまいのモデルを提示したのである。²⁾

以下にも述べるとおり、こうしたことからはずべて、女王イサベル

一世への像につながる。イサベルは、一四七四〜一五〇四年のおよそ三〇年間にわたり、カスティール王国を統治した女王である。彼女はその治世を通して、政治的な問題に携わると同時に、知的世界への関心も保ち、自らの宮廷を構成する人びとについても、その教育に心を砕いていた。第一には、その王子と王女たちであるが、しかし宮廷で暮らすその他の若い男女も、同じく配慮の対象となった。イサベル一世は、文化と知的世界に最も関心の高かったトラスタマラ朝国王、ファン二世の娘であり、母イサベル・デ・ポルトガルと母方の祖母から入念な教育を受けた。父からは知的世界への関心に加え、蔵書の一部も相続し、それはイサベルの基底部分を構成した。その蔵書の中で、イサベルは、中世の女性を書いた作品、すなわちクリスティヌ・ド・ピザンの『女性の都市』との出会いを果たしている。

イサベルは一一歳以前の、人生の第一段階までに、読み書き、計算、キリスト教教義、賛美歌、舞踏を修めた。そのときまでに話したのは、カスティール語とポルトガル語の二言語であった。さらに思春期を迎えると、楽器を奏でたり、歌ったりすることを習得して、音楽にも長ずることになった。また読書を通して、他の学知も手に入れた。また、イサベルの徳育、宗教教育にも注意が払われた。アウグスティヌス会修道士にして、神学者のマルティン・デ・コルドバは、一四六八年から翌六九年、まさしくイサベルの教育のために、『貴族の乙女たちの庭《*El Jardín de las nobles doncellas*》』を綴ったのである。それがイサベル女王の治世を通じて力を持ったことは、著者マルティンの

提言が忘れ去られることのないよう、一四九九年に、この書物が出版されたことから明らかである。文脈からうかがえることではあるが、概してその論題は、女性に対して、明らかに好意的であり、彼女たちに力を与え、肯定的な例を提示している。彼はそのようにして、女性の自己評価を高め、その立場を強めるのに寄与した。すなわち、女性がいよいよの活動分野において、積極的な姿勢、社会に貢献する姿勢を身につけることを勧めたのである。

マルティン・デ・コルドバのこの書物は、正しい統治のための知識の有用性を簡潔に述べた序論に始まり、以下三部から成り立っている。まず第一部では、天地創造に関する全体的文脈のなかで、神が女性をつくりだしたこと、およびその意味に着目している。そのため、この当時すでに顕著になっていた女性の社会的役割が強調されるのだが、とりわけ彼が注目したのは、政治権力の世界で、女性が担った役割であった。すなわち、神が女性を創ったのは子どもを産むためであり、またその婚姻を介し、和解や盟約を固めるのに便利な道具として、家長に寄与するためであったというのである。

第二部の主眼は、女性が持つ善悪の両傾向を述べることに置かれ、善い傾向についてはこれを奨励する一方、悪い傾向には抗い闘うよう促している。そして教育に携わる人びとにとって非常に大きな関心を引くであろう、幼児に対し、母親もしくは乳母が占める役割にふれ、同時代の他の著述家と同様、授乳者たる女性は重要な役割を担っていると述べる。それゆえ第二部第三章では、彼はイサベルに以下の忠告

を行う。すなわち、子どもの養育には細心の神経を払わねばならず、その際には、優秀で誉れ高い乳母を頼みとせよと。なおそうした乳母には、その子が、イエス・キリストや聖母マリアその他の聖人たちの名前を聞き覚えるよう、乳幼児の段階で、子どもを預かってもらうようにも記している。こうした忠告から、靈的な教育がたいへん重要視されていたと考えられる。したがってカトリック女王イサベルに対しては、以下三つの忠告がなされたと考えられる。すなわちよき女王になりたいと望み、自らが担うであろう責務に厳正であることを欲するのであれば、あらゆる知の根幹を成す神を畏れること、正義、正大、調和のうえに成り立つ関係を自らの王国で保ちつづけるべきこと、そして適切な統治を行うことである。そこには次のことも含まれていた。すなわち、富や宮廷の悦楽を無軌道に愛することから身を引くこと、節度ある会話を通して、品位ある人間たらんとすること、その身分が要請するところにしたがってふるまうべきこと、しかるべき行儀作法を守ることである。

最後の第三部では、社会のなかにおける、とりわけ夫との関係における女性の役割をさらに明確に指し示すが、その際、女性にふさわしい美德を伸ばすべきことが強調される。マルティン・デ・コルドバは、ひとつならぬ理由で抜きん出た、往古の徳高い女性を例に出す。第九章では女性の尊大さを批判しているが、罪を犯して悔悛するのは望ましいと肯定する。うわべだけよくふるまって見栄を張るよりは、男性がするように、罪を犯し、悔悛する方がまだ好ましいと説明している

のである。そして、たとえ女性は男性のようにふるまうべきであるとしても、傲慢を避け、謙虚にふるまうよう勧めている。

イサベルを対象にした書物としては、ある意味で驚くべきものがある。すなわち、将来女王になる彼女の教育を方向づけようとしながら、その知育に対する関心は、きわめてささやかなものでしかない。統治には学識が必要だと認めているがである。著者マルティンは、第三部で、模範を示すべく、かつては芸術や文学に専念する女性が数多く存在したと述べるくだりにおいて、この問題を簡潔に扱っている。この時代、権力をとりまく環境において決定権から隔てられているという事実により、学芸を修めた女性が少ないということを弁明している。それゆえ彼がイサベルに対して、統治の必要上、知育に留意すべきことを言い聞かせたことは疑いない。この時代の心性からすれば、かかる学識重視は、貴族の女性全体に、あますことなく広まりうるものであったろう。実際、一五世紀末期の修道士で、イサベルの聴聞司祭でもあったエルナンド・デ・タラベラがベナベンテ伯夫人に対して、昼食後のささやかな時間を、以下のことに割くよう勧めている。すなわち恥かしくない会話をするか、しかるべき音楽を聴くか、あるいは三〇分ほど勉学するようにと。¹⁰

イサベル女王が、こうした方針を、修道士マルティン・デ・コルドバと、ある程度まで共有していたことは明らかである。なぜなら、女王の宮廷においては、貧者や病人を世話し、若年層の靈的教育に従事して、これを徳育に方向づけることが重要な位置を占めていたからで

ある。しかし、こと知育に関しては、彼女はこのアウグスティヌス会士の進言をはるかに越えて前進したのである。イサベルは、個人的に、知識と知的成長に多大な愛着を示した。彼女が、学識習得や知育がよき統治に必要であると理解していたことは疑いない。したがってイサベル女王が、学識の習得は、王家やそれを取り巻く者、つまり、子供たちや奉公人のしかるべき職分であると理解していたこともまた、確実である。イサベル女王は、おそらく厳正なる法的正義を實踐し、平和を守り、王国の繁栄を促すためには、知識習得の必要があると考えていた。実のところ、こういった認識は例のないものではなかった。

人文主義者は知識を擁護して、それが平和に有益で役に立つと主張していた。ネブリハも、女王イサベルに献呈した書物『カステイリヤ文法《*Grammatica*》』の序文において、同じことを示そうとしていたかと思われる。ネブリハの主張によれば、統治のうえでもっとも重要な活動（信仰の統一、グラナダの征服、裁判と法の勝利）が完成を迎えたいま、残る課題は、「*和平の術の開花*」^①だけだったのである。

しかし文化的世界への彼女の傾倒は、こうした政治上の有用性という面のみならず、個人的な愛着の結果でもあった。そうした愛顧の念は、芸術作品の収集にあらわれており、彼女の音楽への嗜好、あるいは彼女の図書室からもうかがわれる。蔵書という点で、イサベルは、女性に関する古典的著作を所持していた。すなわちフランシスコ・エヒメニスの『貴婦人の書《*el Libro de las donas*》』や、また一五世紀半ば、当時の政界で主要な役割を担った人物のひとり、イサベル

女王の父ファン二世の緊密な協力者であったアルバロ・デ・ルナが執筆した、『クララ会士にして高徳の女性たちの書《*El libro de las claras y virtuosas mujeres*》』である。イサベル女王はまた、文化や教育に関心を示し、それが個人の成長にとって望ましく、神より課せられた使命を果たす上では、善行と並んで有益である、という考えを抱いていた。この意味でイサベルは、当時の最先端に位置する女性であった。

ここでは文化を支持する風潮が支配的であり、これについては貴族の蔵書にもうかがわれる。^② その背景として、イサベル女王に近づきうる人びとにとっては、知育や徳育がきわめて有益だと考えられていた、という状況がある。なぜならこうした教育には、きわめて靈的な学識が伴うと認識されていたからである。すなわちロドリゴ・デ・サンチェス・アルバロをはじめ、いく人かの思想家が示したように、よき教育は各人の能力を明るみに出し、悪への傾斜を緩和すると考えられていた。それゆえ当時の人びとは、教育が、何らかのかたちで神の御業に寄与すると思っていたのである。そこから、この分野で両親の担う義務が語られ、専門家、すなわち十分な教育を受けた教師のもとへ赴くよう、子女に奨励することが主張された。なぜならそれは、若者によりよい教育を保証するだろうからである。

イサベルは偉大な政治家であって、学芸に生きる女性ではなかったが、自らとその廷臣の教育を深め、幅広いものにしようと努めた。ファン・デ・ルセナが、カトリック女王イサベルへの献呈書、『養育と高徳な教理《*Crianza y virtuosa doctrina*》』で語ったところによれば、

読み書き、計算、楽器の演奏、舞踏、および身体能力、武具の取り扱
い、話し言葉の矯正、心身の発達上好ましい遊戯、すなわちチェスや
ペロータ（*中世の球戯、テニスの祖形）などが教授されている。当
然そこには女子への教育も含まれており、もちろんそのなかにはイサ
ベル女王の娘たちもいた。

女王は自身の娘たち（イサベル、フアナ、マリア、そしてカタリー
ナ（*キャサリン・オブ・アラゴン））全員に漏れなく、すぐれた教
師をあてがうように細心の注意を払っている。その甲斐あって王女た
ちが受けた教育は、きわめて水準の高いものであった。実際、やがて
暮らすことになる各国宮廷において、王女たちはみな、その教育水準
ゆえに高い賞賛を受けている。これらの宮廷は、彼女たちが知性を披
露する舞台となったが、そうやって示される学識のうちには、ラテン
語も含まれていた。しかし女王イサベルの合理的精神、政治に捧げら
れたその生涯を思えば、我々はつい以下のように考えてしまう。すな
わち彼女は、終始、王権の権威と権力を保証する、よりよい政治的手
段として、宮廷における知的世界への接近に理解を示したのであろう
と。一五世紀末という時代においては、かくあるべきであったと思わ
れる。イサベルが自らの娘たちにごと々な学識を与えたのは間違いな
い。それは王女たちを人として豊かにし、結婚後そこで暮らすべき各
地の宮廷において、他のあらゆる宮廷人の上に立つには、人並みはず
れた風情を身につける必要があることを、彼女たちに知らしめたので
ある。

イサベル女王は、為政者とその周りにいる者には、職務をまっとう
し、同時に、社会全体の先導役を任されるに足るだけの学識が備わっ
ていなければならないことを知っていた。さらに彼女は、臨機応変の
手立てや方策を講じること、宮廷にふさわしい、品格ある作法を遵守
できることも必要だと考えていた。だがそれだけでは、十分でもなけ
れば、有効でもなく、公正かつ謙虚で、道徳的にも敬われるべく教導
されている必要があった。つまり、よきキリスト教徒の務めが万事に
優先される以上、何をなすにも神への畏敬の念がそこに示されねばな
らなかつたのである。イサベルはまた、その権力や王国を磐石のもの
にする際、イメージが重要であることを確信していたかに思われる。
つまり彼女は、他者に自らをどう見せるか、その手立てに政治的な意
味を置いていたのであった。それゆえイサベルは、臣下の者たちや外
国使節の前に姿を現さねばならないとき、衣服、装身具、身ぶりなど、
あらゆる細部に至るまで、注意を払った。廷臣の教育に留意したもの、
おそらくは同じ理由からであろう。この教育には、知育ならびに宗教
教育、そしてイサベル女王自身が女教師ベアトリス・ガリンドから学
んだラテン語と並んで、しかるべき宮廷作法が含まれていたのである。
彼女が推進した宮廷教育は、キリスト教的な靈性教育、知性教育、
宮廷作法の、三つを指すものであった。うち三番目の課題に應じる
べく、イサベルの子どもたちには、それにふさわしい側仕えがあてが
われた。彼らは王子・王女のあらゆる必要を満たし、その身分の高さ
を示す品格を現実のものとする一方で、宮廷生活のさまざまな局面に

関して、「教育係」の役割を果たしたのであった。

音楽、歌唱、そして舞踏は、宮廷作法と厳密な意味での教育との、その二つの道の中間に位置づけることができた。事実、ロドリゴ・サンチェス・アルバロは、戦争や狩猟に加えて、歌唱、楽器を奏することも、王侯貴族にふさわしい、学ぶべきことであると考えていた。女子は音楽や舞踏に通じている必要があった。しかしながら、男性固有の技能（戦争、狩猟）を持たぬかわり、彼女たちが、馬に乗り（移動するのに不可欠だった）、狩りに通曉し、そして男性が持つ戦士としての能力を評価することができるよう学習していたことも、知っておかねばならない。

音楽は、宮廷においてさかんに奏でられた。イサベル女王の音楽趣味は周知のとおりであり、彼女が宮廷の教育プログラムに舞踏を取り入れたことも、それゆえ驚くにはあたらない。王太子とその姉妹は、多彩な楽器を弾きこなした。王女フアナの音楽熱と技巧はよく知られている。音楽へのこういった全面的傾倒は、なんら奇異なものではない。なぜなら音楽は、宮廷儀礼と教会典礼のいずれにおいても、王家の壮麗さを、すなわち神聖なる荘厳性を彩る機械装置として、用いられていたからである。宮廷礼拝堂における音楽の活用については誰も認めるところだが、イサベル女王は、さらにまた別の機会にも、音楽とともに姿をあらわす。たとえば一四八九年、同名の王女イサベルとともにバサ攻囲戦へ赴いた際には、楽器（バスタルダ、ラッパ、イタリア風トランペット、シリミアス〔縦笛〕、サックバット〔*ト

ロンボーンに似た中世の楽器〕、ドゥルサイナ〔*クラリネットの祖形〕、アタパッレス〔太鼓〕奏者が多数供をしている。

宗教的な霊性教育と知的教育とは緊密に結びついたものであって、そのため、王太子とその姉妹の教育には相応の教師が求められた。王子・王女は、各々別々に教育を受け、また年齢に応じてグループ分けされていた。すなわち年長のイサベルとフアナの教育は、年少の二人の王女とは別になされたのである。^⑤

差異や階級の標しともなる、一定の学識に接近することを促した人文主義の傾向が、この時期、知的分野で抜きん出た女性を、他にも生み出したことは間違いない。一五世紀の末には、正確にやり遂げれば宝石を与えると約束して、娘を読み書きの習得に駆り立てたフランススコ・デ・スニガのように、女子の勉学を後押しする家もみられたのである。^⑥ イサベル女王の廷臣にも、学識豊かな女たちがいた。たとえば、ルシオ・マリネオ・シクロに師事した女性フアナ・デ・コントレラス、あるいはエラスムスの著作を翻訳した女性イサベル・デ・ベルガーナなどがそれにあたる。前者の師父、ルシオ・マリネオは、後者イサベル・デ・ベルガーナを、ラテン語とギリシア語に精通していたといつて称賛している。彼女らの他にも、より積極的な役割を担った女性として、ルシア・メドラーノとフランシスカ・デ・ネブリハが挙げられる。いずれも父親は、この当時の傑出した人物であり、それぞれサラマンカとアルカラ・デ・エナーレス（の両大学）において、教鞭を執る人物だった。女流詩人フロレンシア・ピナルも忘れてはな

らない。彼女の生涯について知りうることはほとんどない。しかしその歌と詩は、今日まで伝わっている。

もっともカトリック西王の王女たちが受けた教育に比べれば、上記のいかなる教育も取るに足りない。彼女たちには、カステイリヤ語とラテン語の書物が買ひ与えられ、選りすぐりの教師、ヒラルディーノ兄弟があてがわれた。兄弟のうち、アントニオが、王女イサベルの教育にあたり、アレハンドロはマリアとカタリーナを担当したのであった。

女王と同名の長女イサベルの幼少期については、知りうるものがほとんどない。彼女が生まれたのは、母「つまり、イサベル女王」がまだ王位継承者の地位にあるところで、そのため苦難に満ちた時期であったことを考慮すべきだろう。すなわち王位継承戦争が勃発したため、九歳になるまで、この幼い長女の教育は、ある程度おろそかになってしまった。それでも十全な教育を受けたことは疑いない。一四八八年に没するまで彼女の教育に身を捧げた、前述のアントニオ・ヒラルディーノに加え、一四八六年以降は、修道士ペドロ・デ・アンブディアも、教師として姿をあらわす。その報酬として、同修道士には年間五万マラベティスが支払われたが、これは王女ファナの教育に対する報酬と同額であった。しかし一四九二年には、その額は六万マラベティスに上昇し、その後、彼が没するまで、変わることはなかった。こうした教師への報酬は、その教え子たる王女たちの身分と結びついている。王女イサベルがポルトガルの王位継承者と結婚し、王女から王太子妃

になるや、教師の受給額もまた、それに合わせて増えているからである。このようなすぐれた師父たちに加えて、王女イサベルとその姉妹たちには、ラテン語、カステイリヤ語の蔵書があった。そこには二冊の時祷書と一冊のロマンセ（当時のスペインで広くつくられていた物語詩。一行八音節から成る。譚詩）がみられる。さらに一冊のラテン語書物もあったが、これは母親のイサベル女王から贈られたものであった。

王女ファナにもまた、専属の教師がつけられている。史料上、ラテン語教師と記される修道士、アンドレス・デ・ミランダがそうであって、彼が自らの職分をまっとうしたことは、ファナが長じてから宴会を開き、そこで幅広い教養を示していることにもうかがわれる。あるいはまた、彼女のフランス語およびラテン語知識からも、それが看取される。ブルゴーニュ宮廷において、ファナは、一度ならずその学識で称賛を受けることになった。アンドレス・デ・ミランダは、一四八五年に、王女の師父として召し出されているが、ここから王女ファナが、六歳という早い時期から、同修道士の教育を受けていたことが知られる。教育問題の専門家が、男子教育は七歳からと勧めるのが常であることを考えれば、ファナの例は、早期教育であるといえよう。なおこの一四八五年以来、修道士アンドレスは、ファナがカステイリヤを後にする一四九六年まで、彼女の傍らに付き添っていた。年俸は、初年五万マラベティスであったが、翌八六年以降は八万マラベティスに引き上げられた。これは王女ファナが、オーストリア大公と婚約し

たためであって、実際、このとき以来、修道士アンドレスは「大公妃の教師」と称されている（やがてフアナがカステイリヤの王位継承者になると、彼の呼称も「王位継承者の教師」に変わった）。王女フアナはまた、おそらくはベアトリス・ガリンドなどの女性たちからも、ラテン語を教授されていた。というのも、王女の取り巻きによる、「王女の奉公人にしてラテン語の女教師」への言及例が、一四八八年にみられるからである。

残る年少の王女たち、すなわちマリアとカタリーナは、おそらく金銭的には母方の負担のもと、二人でその教師を共有した。一方の王女マリアは、一四八九〜九〇年の最初の二年間は、姉とともにアンドレス・デ・ミランダの傍に置かれた。ここからマリアの教育は、姉フアナと同様、六歳の時点から始まったことがうかがわれる。やがて一四九三年以降、マリアとカタリーナの教育は、アレハンドロ・ヒラルデイーノに委ねられた。アレハンドロが受け取った報酬は、一四九九年までは年五万マラベイスであった。なおその後、マリアは一五〇〇年、カタリーナは一五〇二年に結婚するが、この間のできごとについては知られていない。

このような教師たちと宮廷という環境を通して、王女たちには、宗教、学識、宮廷作法の面で、きわめて入念な教育が施された。この四人の王女は、母イサベル女王の宮廷でよい教育が行われていたことを示している。その舞台になったのは、何よりもまず、結婚後、彼女たちが暮らしていかなければならなかった各地の宮廷、すなわちイサベ

ルとマリアはポルトガルの、フアナはブルゴーニュの、そしてカタリーナにとってはイングランドの宮廷であった。

王女だけではない。イサベル一世の宮廷では、それ以外の女性たちも教育を受けた。明示的な証拠はないとしても、宮廷に文字を読める女性がいたことは明らかである。王女たちのまわりにいた者が、王女とともに教育を受けたことも疑いない。それは女王イサベルが彼女たちに対して、書物を贈与していることからもうかがわれる。また他方、こうした環境にあつては、知育を享受し、各自の家庭環境に依じて、それを奨励された知的な女性たちがおり、そのなかには先に述べたような、イサベル女王を取り巻く宮廷人も存在した。前述の女性たちに加え、さらにカタリーナ・メドラーノを挙げることができよう。少なくとも一四九七〜一五〇四年の間、女王の女官を務めた彼女は、ルシア（・メドラーノ。41頁参照）とは姉妹関係で、したがってサラマンカ大学の教師を父親として生まれた。マリア・パチエコもここに加えてよい。彼女はテンデイージャ伯の息女で、ファン・デ・パディージャの妻となったが、ルシオ・マリネオ・シクロと知的な会話を交わす女性であった。さらに時代はやや下るものの、一六世紀の女流人文主義者たるマグダレーナ・デ・ボバディージャも、フェリペ二世期に大量の書簡を遺している。

それゆえイサベル女王の教育活動は、女性たちが抱いていた、学識を培わねばならないという自覚、知的成長に身をささげようとする行動に呼応したものであった。この点、他ならぬイサベル女王自身が、

豊かな知識に満ち、幅広いことがらに関心を示した人物であった。とりわけ歴史に向けた関心は際立っている。そのうえ彼女は、学識高い人びとを周囲に置くことができた。それがイサベル女王の宮廷における、文化に対して好意的な雰囲気を促進し、若年の貴族たち、ならびに礼拝堂の独身男性、女児や成人女性、そしてとりわけ自らの王女に対する教育を促した。彼女が主要な役割を果たした他の企てと同様、教育においても、イサベルは成功を収めたといえよう。その裏付けとなるのが、「一六世紀の著名な人文学者」ルイス・ビーベスによる以下の言葉である。すなわち、その著『キリスト教徒女性の教育』(Instruction de la mujer cristiana)』には、イサベル女王の四人の王女は、いともよき教育を受け、それゆえフランドルではフアナへの賞賛篤く、ポルトガルにおいてはイサベルとマリアが、そしてイングリランドでもカタリーナが、その教育と教養を称えられている、と記されたのであった。

註

- (1) Maria Isabel del Val Valdivieso, *Isabel la Católica, princesa (1468-1474)*, Valladolid, 1974.
- (2) M^{ra} I. del Val Valdivieso, *Isabel I de Castilla*, Ediciones del Oto. Biblioteca de mujeres, Madrid, 2004. カタリック女王「イサベル」ローマ教皇からイサベル一世に贈られた尊称であり、そこから通常カタリック女王とよばれる「イサベル」を意味する。

- (3) M^{ra} I. del Val Valdivieso, "Las mujeres en el contexto de la familia bajomedieval. La Corona de Castilla", (ed. Carmen Trillo San José), *Mujeres, familia y linaje en la Edad Media*, Universidad de Granada, 2004.
- (4) M^{ra} I. del Val Valdivieso, *Isabel la Católica y su tiempo*, Universidad de Granada y Sociedad Estatal de Commemoraciones Culturales, Granada, 2005.
- (5) M^{ra} I. del Val Valdivieso, "El camino al trono de Juana I de Castilla", *La voz del olvido. Las mujeres en la Historia*, Universidad de Valladolid, 2003.
- (6) M^{ra} I. del Val Valdivieso, "El mal, el demonio, la mujer (en la Castilla bajomedieval)", *Privir siendo mujer a través de la Historia*, Universidad de Valladolid, 2005.
- (7) Cristina Segura Graño, "Las mujeres en la época de Isabel la Católica", J. Valdeón (Ed.), *Sociedad y economía en tiempos de Isabel la Católica*, Valladolid, Ámbito-Universidad de Valladolid, 2002, pp. 183-200. M^{ra} del Mar Graña Cid, "Religión y política femenina en el Renacimiento castellano. Lecturas simbólicas de Teresa Enriquez", Ana Isabel Cerrada Jiménez, Josemi Lorenzo Arribas, *De los símbolos al orden simbólico femenino (siglos IV-XVII)*, Madrid, Al-Mudayna, 1998, pp. 145-172.
- (8) Rafael Alemany Ferrer, "La Vita Christi de sor Isabel de Villena", Cristina Segura (ed.), *La voz del silencio. I, fuentes directas para la historia de las mujeres (siglos VIII-XVII)*, Madrid, Al-Mudayna, 1992, pp. 251-264.
- (9) Martín de Córdoba, *Jardín de las nobles doncellas*, Edición y estudio de Fernando Rubio, *Prosistas castellanos del siglo XV*, T. II, Madrid, BAE, 1964, pp. 69-117.
- (10) I. Becerro Pita, "Educación y cultura en la nobleza (siglos XIII-XV)", *Anuario de estudios medievales*, 21, 1991, p. 581.
- (11) Alan Deyemond, "La ideología histórica de Antonio de Nebrija", F. Moreno,

- F. Gimeno, J. A. Samper, M^a L. Gutiérrez, M. Vaquero, C. Hernández (Eds.), *Lengua, variación y contexto. Estudios dedicados a Humberto López Morales*, Madrid, Arco Libros, 2003, p. 960.
- (12) M^a I. del Val Valdivieso, "Isabel la Católica en el contexto cultural de su tiempo", J. Valdeón (Ed.), *Arte y cultura en la época de Isabel la Católica*", Valladolid, Ámbito, 2003, pp. 369-390.
- (13) Jaquín Yarza Luaces, *La nobleza ante el rey. Los grandes linajes castellanos y el arte en el siglo XV*, Fundación Iberrola, 2003, pp. 273-307. 聖ドレズロイカドリアリスロ・ト・ホスエマリガ' フロンン・ト・ジュメントナ' 4895256624メトヤナ・シユリトの權轉ドリスドレ' M. Á. Ladero Quesada y M^a Concepción Quintanilla Raso, "Bibliotecas de la alta nobleza castellana en el siglo XV", *Libre et lecture en Espagne et en France sous l'Ancien Régime (Colloque de la Casa de Velázquez)*, Paris, 1981, pp. 47-63)°
- (14) Therese Oettel, "Una catedrática en el siglo de Isabel la Católica: Luisa (Lucia) Medrano", *Boletín de la Real Academia de la Historia*, CVII, 1935, pp. 298-299. M^a Isabel del Val Valdivieso, "La educación en la corte de los Reyes Católicos", J. Valdeón y K. Rudolf (Eds.), *Fernando I (1503-1564). Infante, archiduque, rey y emperador. El otro nieto de Isabel la Católica* (en prensa).
 かなる教誨と書物' 教育活動や同姓文化に關するもの聖の職業に關する
 こと 公トや聖トト權轉を中央に設けな聖ドレ' Antonio de la Torre y E. A. de la Torre, *Cuentas de Gonzalo de Baeza, tesorero de Isabel la Católica*, 2 vols. Madrid, CSIC, 1955)°
- (15) I. Beceiro Pita, "Educación y cultura", p. 587.
- (16) M^a Dolores Ballesteros García, "Florencia Pinar. El hecho literario o el sueño de las periceses", M^a del Mar Graña Cid (Ed.), *Las sabias mujeres. II*, pp. 157-172.